

# 航空

## 涙の初年兵

### 二年半最前戦でも

新潟県 唐津 丈平

私は尋常一年生のとき、カバン一つ持って今の内西受地町唐津の家庭に養子に來ました。状態としては何不自由なく暮らしていましたし、会社は島本鉄工場に旋盤士として勤務。年明け後、現役兵（徴兵検査は昭和十七年兵）として昭和十八年九月十日入隊、千葉県柏第四教育隊（航空兵整備兵）として教育を受けました。

百式司令部偵察機の整備教育を受け、昭和十九年七

月南方転出、比島に上陸、第十三飛行場中隊へ勤務しました。内地の家族には送金なし、音信は随分しましたが家族の生活は変わりなかったと思います。

初年兵教育は内務班生活など、今思うとまるで毎日毎日地獄、話のしようもなく、二年半も後の新兵が続かず、毎日よくぞ殴られたなど、よくぞ生き延びたと思います。

四十人転属したうち、内地へ復員したのがたったの四人。

昭和十九年八月十八日比島に上陸しましたが、ネルソン飛行場では戦果も上がらず、戦況はだんだん悪くなりました。十月ごろだったと思いますが、ビルマから転進して来た第二〇四戦隊（隼）の整備に当たりました。飛行場の真中でピットで機銃の弾入れや燃料の

入れ替えなど全部初年兵です。グラマンが機銃で突っ込んで来る。隼の機銃の弾がなくなり空中戦中飛行場に降り、素早く取り換えるのです。古参兵は壕の中、古参兵いわく、「俺たちは九七戦の脚の出ないのばかりで」と言い訳です。二年兵だっているのに仕事を覚えようともしせず、手伝いもせず、ただただタバコを吸いながら見ておるばかり。

その間レイテ作戦、空挺隊三十機参加した第一〇六戦隊で百式司令部偵察機でした。レイテ作戦では一月も、持たずです。

昭和二十年六月二十五日よりツエガロウの東方シエラマドレー山中に再起をかけた転進をするのやむなきに至りました。この山中は南方特有のジャングル地帯で、木の枝は繁り、多くの根をおろし、昼なお暗く、「山ひる」が多く生息し、毎日スコールが襲来するなど最悪の深い山中でした。食糧はなく飢えと病魔との戦いで、疲労困憊の極にたちし、ついに部隊は解散のやむなきにいたり、生存者は三々五々米軍に収容されました。北部地区はツエガロウからアパリに全部集結

され、船でマニラに行き捕虜生活です。昭和二十一年十二月二十五日名古屋に着き復員しました。

## 【解 説】

―涙の初年兵・二年半最前戦でも―

体験記執筆者の唐津氏は、一年間航空整備兵として教育を受け、フィリピンの第十三飛行場中隊に勤務したという。飛行場大隊・中隊については、他で解説したので省略するが、飛行場中隊は外地に七十三隊あった。第十三中隊はフィリピン、マニラ、タクロバンに所在したという。フィリピンの第四航空軍隷下の中隊は第八、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四などであった。また第十三中隊の通称号は「威一〇六五八」であり、「威」とは第二飛行師団の称号である。

また、文中、ビルマから転進してきた第二〇四戦隊は「誠一〇七二」であるので、籍は台湾（花蓮港）で、第八飛行師団―第十三飛行師団であろう。

レイテ作戦、空挺隊に参加した第一〇六戦隊とある

が、内地―比島―台湾―内地と転戦した「威一八九二四」である。

次に「百式司令部偵察機」につき若干説明をしたい。

「百式司偵」は、その快速にものゝをいわせて大空を駆けめぐった。試作機名は「キー四六」と称され、第二次世界大戦における最高傑作である。傑作機というのと、海軍の零式艦上戦闘機（ゼロ戦）、陸軍のキー四三・一式戦闘機（隼）などがあるが、ナンバー・ワンは「百式司偵」を以て外になしである。

「百式司偵」は、世界最初の司令部偵察機となった「九七式司偵」（昭和十二年五月制式採用）の後継機として、同年十二月二十七日、早くより試作指示が出て、十四年八月、試作第一号機が完成、岐阜県各務ヶ原飛行場で試験飛行が実施（テストパイロットにより）され、一部の改善が行われた。

十五年に各地で各種試験が実施され、八月十日、ようやく終了した。その試験は立川―大村間往復無着陸（一九二〇キロ）の長距離飛行三一七回にわたる離着陸テスト（一機最高一〇七回）も実施された。このテ

ストで、最大速度（高度四、一〇〇メートル）で、最高速度五四〇キロを記録した。陸軍の要求六〇〇キロには達しなかったが、一式戦「隼」の四九〇キロ、双発複座戦闘機「屠竜」の四八〇キロ、海軍の十二式艦戦、零式艦上戦闘機の五一〇キロより、はるかに速かった。戦闘機の追撃を振り切るに十分なスピードは、任務を達成できると評価され、試作「キー四六」は百式司令部偵察機型として、十五年十一月十八日（大東亜戦争勃発約一カ年前）正式に採用され、二十六機が生産された。

しかし、「百式司偵一型」の性能、特に速度は前述のごとく陸軍要求を満足させるものでなかった。昭和十六年三月、性能向上を図ることとなり、完成したばかりのエンジンの「八一〇二（一型）に装備した八二六「瑞星」に二速温給器というのを付けて、与圧高度を上げた性能向上型）に換装したという。

要するにエンジンのパワーアップを図ったわけだが、このテストの結果は、高度五、八〇〇メートルで六〇四キロという陸軍の要求を上回る速度を出すことがで

きた。空冷式エンジンでは時速六〇〇キロ以上出すのは無理だといわれていた、この常識を覆すスピードだったため、信じてない者もいたが、六〇〇キロを突破した日本最初の機体となったのであるという。

これを「百式司偵二型」として採用され、直ちに量産に入った。更に改良が加えられ四型まで、試作機を含めて合計一七四機が製作されたが、この二型機が最も多く、一〇九三機生産されている。

「司偵」は、双発単葉のスマートな型をした飛行機で、空の情報収集が任務であった。航空本部では「主として航空作戦における神速なる情報の収集及び連絡に任じ、隠密挺身的に行動せしむ、云々」と任務づけられていた。